

能登戦国の内乱と大槻・一宮合戦



眉丈山系(左)と石動山系(右)に挟まれた邑知潟平野を羽咋から七尾方面に望む(石川県羽咋市)

戦国時代の能登の内乱で、最大規模の合戦の舞台となったのは、能登・越中国境の石動山系とその西に位置する眉丈山系の挟間に形成された邑知地溝帯の北西域で、加賀と能登を結ぶ西往来筋に位置した鹿島郡の大槻(現中能登町大槻)と、日本海に面して半島を南北に走る外浦街道と七尾に向かう内陸部の西往来が分岐する羽咋郡一宮(現羽咋市一ノ宮町付近)であった。

能登畠山七人衆の登場

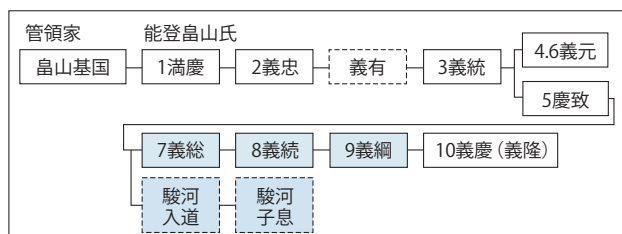
能登では、戦国中期の30年間にわたり、領国の政治的安定と地方武士文芸の高揚をもたらした七尾城主の能登守護畠山義総(7代当主)が、天文14年(1545)7月に死去すると、次男の8代義統が家督を相続した。

しかし同16年(1547)閏7月、先に一族の内紛で加賀に遁走していた義総の弟駿河入道が能登に攻め入

ると、畠山家臣の温井一族が、羽咋郡押水(現宝達志水町)で数百人を討ち取りこれを撃退した(押水の戦い)。このため能登畠山家臣団の内、温井総貞(紹春)^{*1}の政治的地位が高まった。

次いで天文19年(1550)7月から翌20年春頃にかけて、能登では守護義統の治世に不満を持つ有力家臣間の確執などにより再び内乱状況に陥った。このとき義統は七尾の本城から一時出城に逐われており、2月16日には、温井方が石動山大宮坊などに放火する動きもあったが、3月1日に至り、七尾城をめぐる騒乱は落ち着いた。

その結果、内乱の鎮静化に主導的役割を果たした、守護代の家筋にあたる遊佐統光^{*2}と温井紹春を中心と



能登畠山氏略系図



能登畠山七人衆の連署(署名と花押)「栗棘庵文書」

- ※1 能登畠山氏の重臣、畠山義総・義統・義綱3代に仕える。奥能登輪島を本拠とし、義総の近臣として台頭。「大槻・一宮合戦」で遊佐統光に勝利し、勢威をほしいままとしたが、弘治元年(1555)大名権力の回復を目指す畠山義統・義綱父子に暗殺される。
- ※2 能登畠山氏の守護代を世襲した家筋。「大槻・一宮合戦」で敗れ、能登から逃亡したが、温井紹春死後に帰参。永禄9年(1566)に義統・義綱父子を能登から追放し、傀儡の義慶(義綱の子息)を擁立。その後、上杉謙信の能登進攻の際には、謙信に内応して上杉勢を城内に引き入れ、七尾落城・畠山氏滅亡に導いた。
- ※3 能登の有力国人長氏の嫡系で、鳳至郡穴水を本拠とした。戦国中期に室町幕府奉公衆から畠山氏重臣となり、やがて遊佐・温井氏を抑えて畠山重臣の筆頭格に台頭する。七尾落城の際に、上杉謙信により一族郎党が皆殺しとなったが、織田信長の許に支援要請に向かっていた統連の子の長連龍が独り生き残り、以後連龍は、織田家臣、前田利家の与力として加賀・能登統治を支援した。

する長統連^{ちようつぐら}※3・三宅総広^{みやけふさひろ}・平総知^{ひらふさとも}・伊丹統堅^{いたみつぐかた}・遊佐宗門^{うさそうもん}の重臣（年寄）が、領国支配の実権を掌握した。本願寺（10世）証如は、日記『天文日記』のなかで、この7人のことを「畠山七人衆」と記している。

鹿島郡「大槻の合戦」

一方、守護畠山義統は、天文20年（1551）暮頃、嫡男義綱（9代）に家督を譲って後見人となり、七人衆から権力奪回の際を窺った。その後七人衆の主導権をめぐり、遊佐統光と温井紹春の間に確執が生じ、やがて抗争に敗れた統光・伊丹統堅等が国外に逃亡。これを機会に、温井紹春は表面上引退したが、実質的には覇権を掌握することになった。

次いで同22年（1553）12月10日に至り、遊佐統光は、河内衆（管領家畠山氏の家臣）の遊佐源五・安見紀兵衛等の支援を得て、加賀から能登に侵攻し、七尾城下と3～4里隔てた鹿島郡の大槻と田鶴浜（現七尾市田鶴浜町）に陣を布き、12月27日には、大槻で七尾城方と遊佐勢の間で合戦が展開された。

『長家家譜』によれば、この合戦に先立ち、遊佐方は5000の軍勢を率いて「羽咋の浜」に進撃し、ここで七尾城方の畠山将監勢800を撃破して、討ち取った首級90を梟したとある。その後、羽咋郡の一宮に居陣の後、一宮から内陸部の山側の道（中道通）を進み、同郡の滝谷（現羽咋市滝谷町）・賀茂荘（現志賀町矢駄・倉垣・安津見付近）を経て、奥山峠（現志賀町と七尾市の境）を越え、鹿島郡の田鶴浜・大槻に至った。そこで温井統宗（紹春の嫡男）・長統連勢を主力とする七尾城方の畠山軍6000と対峙したとみえる。

しかし大槻で展開された合戦の結果は、遊佐勢が温井統宗等の七尾城方に切り崩されて敗北し、畠山駿河子息・遊佐弾正左衛門・加治中務丞・後藤備前や加賀衆（一向一揆）のほか、雑兵400余人が討ち取られた。このため田鶴浜に居陣していた遊佐統光は、陣を引き払って再び先に一路攻め入った眉丈山系を越え、賀茂荘・中道通経由で、一宮に至る道筋を辿り退却したのであった。

軍勢	遊佐統光軍 (叛乱軍)	畠山義統・義綱軍 (七尾城方)
兵力	5,000	6,000
総大将	遊佐統光	温井紹春（総貞）
主力	畠山駿河子息、遊佐一族 伊丹統堅、加治中務丞 後藤備前、丸山出雲守 河野統秀、平左衛門六郎 千手院、加賀衆（一向一揆）	長統連 温井統宗 畠山将監 遊佐宗門
支援者	遊佐源五・安見紀兵衛（河内衆）	

能登大槻・一宮合戦の勢力

羽咋郡「一宮の追撃戦」

大槻合戦の直後に、勝利した七尾城方の畠山七人衆が、大坂本願寺内衆の下間頼資に送った書状（石川県立図書館所蔵『雑録追加』所収）によれば、七尾城方が遁走する遊佐勢を追って、翌12月28日、一宮で追撃戦に及び、河内衆の遊佐源五・安見紀兵衛や加賀衆を含む、遊佐勢2000余人を討ち取り勝利したとある。しかし大將の遊佐統光の落延び先は不明とされ、遊佐豊後入道（秀頼）・平左衛門六郎など遊佐方の有力諸將を、七尾城方が生け捕ったともみえている。

また合戦から2カ月を経た天文23年（1554）2月14日に、温井紹春が、師檀関係にあった京都の東福寺塔頭の栗棘庵に、能登での戦勝を報じた書状（京都大学総合博物館所蔵『栗棘庵文書』）には、一宮合戦において、遊佐孫四郎・同孫八郎などの遊佐一族や、伊丹宗右衛門尉（統堅）・丸山出雲守・同丹後・河野藤兵衛（統秀）など遊佐方に属した旧畠山氏の有力家臣のほか、河内衆の遊佐源五・安見紀兵衛や「加州之者」（一向宗徒）など都合4000余人を討ち取ったとあり、叛乱軍の大將であった遊佐統光は、このとき越前に遁れたとみえている。

一宮合戦で討ち取られた遊佐統光の軍勢の数には、前述の2通の書状内容に相違はあるが、討たれた武将の顔ぶれは、かつて七尾城内の畠山家臣の名だたる人々であり、遊佐氏の叛乱が、畠山家中を二分した大規模な軍事的抗争であった事情が窺われる。

暮れも押し迫った大槻・一宮合戦の時期は、恐らく能登では積雪があった可能性が高く、雪の中での激闘により、白雪に覆われた大槻・一宮の山野は、一瞬にして修羅場と化し、鮮血に染められていたに違いない。

「一宮」の地名は、当地に鎮座する能登国一宮の気多社に由来するものであり、同社の周辺には、当時町場が形成されており、隣接する竹津（現羽咋市滝町）は、羽咋郡南部の日本海の泊津であった。一宮合戦で大敗した遊佐統光が、越前に密かに逃亡した経路は、竹津から舟で海路三国湊に向かったものであろう。



畠山義統・義綱軍（七尾城方）と遊佐統光軍（叛乱軍）の進路